

なでしこジャパン

中村 龍介

朝、ベッドから起きてパソコンを開き、先ず受信メールを確認するのがいつもの習慣になった。

七月十八日の朝は何だか様子がちがっていた。たくさんの迷惑メールとともに、アメリカ、ドイツそれにトルコの知人から「コングラチュレーションズ！」のメール。「ワールドカップ優勝、おめでとう！」とある。そういえば、前日の深夜に日本とアメリカの決勝戦があった。サッカーにそれほど興味はなく、ましてや二十三回も戦って一度も勝てなかった相手だ。負けるに決まっていると勝手に思い込み、中継があったことすら忘れていた。

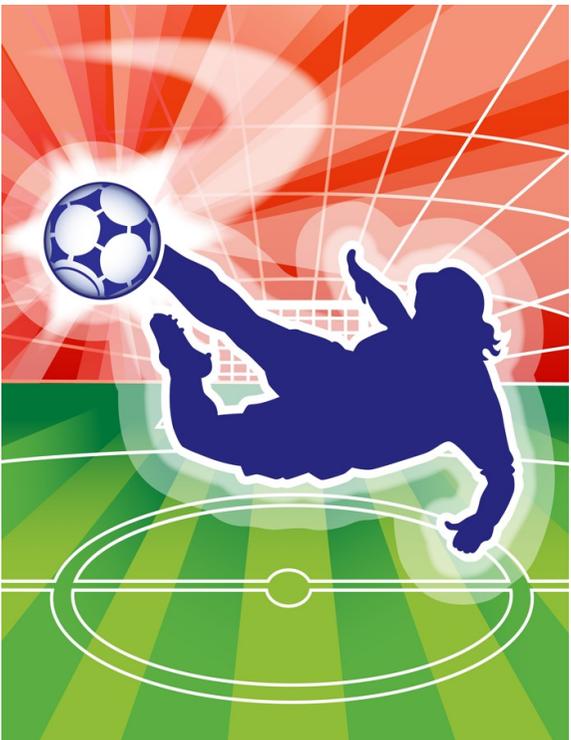
まさか！ と慌ててテレビのスイッチを入れる。とたんにブルーのユニフォームの選手たちが踊り上がっている光景が飛び込んできた。スタンドでは大きく日の丸が振られている。勝ったのだ！ 画面に釘付けになった。

準々決勝でドイツを破ったときには信じられない気持ちでニュースを観た。準決勝ではスウェーデンに圧勝、メダルが確定した。そこまでやればもう十分期待に応えた。それ以上願うのは酷だとさえ思った。ところが、決勝戦では体力的に圧倒されそうな相手の猛攻撃に耐えながら、まさかの逆転劇。信じられない。奇跡だ。

男子サッカーの圧倒的な人気に較べると、女子サッカーは従来からメディアにも殆ど取り上げられることはなかった。男子チームは大金を投じて外国から監督を招聘し、輝かしい実績を誇る著名な監督が次々と鳴り物入りでやってくる。

一方、女子は一貫して一人の日本人監督の下でひっそりと練習を重ねてきた。しかも、日本女子代表の多くはアマ選手。昼間働いて夕方から練習する。

佐々木則夫氏。ネットで検索すれば同姓同名のT社の社長が出てくる。それほど無名の監督なのだ。その佐々木監督の率いるなでしこジャパンが並みいる強豪を打ち破って、見事ワールドカップを手にした。大変な偉業である。彼女たちの



強さの秘密は一体何処にあるのだろうか。

一般に、スポーツチームの監督には二つのタイプがある。「鬼の大松」と言われた、女子バレーの大松監督は、恐怖と叱咤でスパルタ式に選手たちを引っ張り、東京オリンピックでは「東洋の魔女」を金メダルへと導いた。これに対して、佐々木監督は選手を叱ることをしない。あくまでもお友だちスタイルを保ち、決戦前にはおやじギャグを連発して選手の緊張をほぐすという。

選手たちは監督のことを「則（のり）さん」と呼び、友達のようにだと異口同音に語る。大松氏とはまるで「北風と太陽」ほどの違いだが、なでしこジャパンでは佐々木監督のスタイルこそが沢選手のようなスーパースターを生み、結果として日本チームの快挙へとつながったように思う。

指導方法こそ違え、目的は「勝利すること」であり、そのために選手の持てる力の最大限を発揮させる。どちらの監督にも、その指導の根底には共通のものがあるはずだ。それは選手たちに対する「愛」ではないだろうか。

(了)

〔二〇一一年七月記 原稿用紙約四枚 課題「愛」〕